



粘り強く続けられてきた生活面の立て直しは、活発な生徒会活動など、生徒の自主性に根ざしたものと到達している。朝の読書活動も、生徒の内面を変えたばかりか、近隣の保育園への読み聞かせ活動を生み出すほどだ。

中学校と小学校の一番大きな違い。それは教科担任制だろう。「当たり前のこと」と思われがちだが、それが生徒に及ぼす影響は計り知れない。彼らの目から見れば、小学校で教わる先生は基本的に1学年1人だったものが、中学に入ったら途端に10人を超える先生から教わることになる、それぞれの先生とのつながりははやかに希薄になってしまふ。一方で先生たちも、教科ごと縦割りに組織化され、生徒たちと向き合う学年の運営が空洞化しているのではないだろうか。

黙り込む生徒たち

とはできないだろう。先生方が入れ替わり立ち替わり教壇に立つて教科書を読み、板書しては去っていく。生徒たちは黙って話を聞き、板書をノートに書き写すのみの「講義型」授業。一方ではそうした授業でさえも成立せず、荒れていく学校も少なくない。これらは別々の現象ではなく、同じ根を持つのではないか。そんな視点からの取り組みが、今、中学校を変え始めた。

立ち上がる先生たち

「本校も、5年前までは授業の成り立ちにくい学校でした」そう話すのは岩上校長先生。生徒たちの明るい笑顔、清掃の行き届いた校舎内外を見るにつけ、私たちは信じられない思いで先生の話に聞き入った。「生徒たちは落ち着きがなく、当然学力も上がらない。本校も多くの中学校と同じ悩みを抱えていたのです。本校の先生方は清掃活動やあいさつ運動、合唱祭や朝読書といった取り組みに力を入れ、粘り強く学校を建て直してきました。中でも効果を上げたのが、中学ロボコンへの取り組みです」生徒が互いに力を合わせ、知恵を集めてロボットを製作、競技に挑む中学ロボコン。仲間と協同して課題を克服する喜びが、生徒の目を輝かせる様子を、先生

や保護者は目の当たりにした。その主体的な学びの成果に、技術科以外の先生方も強く触発されたことは想像に難くない。「そうして本校はかなりの落ち着きを取り戻しました。それでも肝心の授業となると、まだ十分でなかったことも事実です。そんなとき、本校の研究主任など数人の先生が、ある中学校の視察に出かけ、大きな感銘を受けて帰ってきました」その視察先こそ、授業改革を中心に据えて学校を生まれ変わらせたと言われる、静岡県富士市立岳陽中学校だった。東京大学大学院教育学研究科の佐藤学教授の指導の下、教職員が一体となつての改革は大きな成果を上げ、全国の中学校から熱い視線を集めている。

「視察から帰った先生方が『ぜひ私たちもこうした取り組みを進めたい。できれば佐藤先生の指導が受けられないだろうか』という相談を持ちかけてきました。そこで思い切つて先生に相談のご連絡をしたのです。佐藤先生は案の定ご多忙でしたが、ある日突然『お伺いしましょう』というお返事をいただきました。本校の先生方も大喜びで、一気に取り組みが本格化したのがこの春です」

寄り添い支える学び

「今日のテーマは『ハンバーガーショップを共同経営してみよう！』です。今から経営資料を配りますね」

3年2組の社会科の時間。牛山先生の呼びかけで授業はスタートした。ベテランらしい貫禄ある風貌とは対照的に、明るく柔かな語り口が印象的だ。

グループごとに手渡された封筒には街の絵地図とその箇中の立地候補地の解説のほか、ハンバーガーショップの利用客についてのデータ、駅の乗降客と道路の交通量のデータ、そして情報分析を行い候補地を絞り込むためのワークシートが入っている。中野平中がある街、



授業者

つちだ やすひろ
土田恭博先生
技術科のイメージからかけ離れた風貌を持つ土田先生。やわらかな物腰で生徒に語りかける授業は温かなムードに包まれている。知的財産教育についてのアプローチは先進的だ。



授業者

うしやまみちたか
牛山通高先生
研究主任として中野平中の授業改革をリードする一人が牛山先生だ。自ら目にした改革推進校の様子に感銘を受け、その取り組みにまい進する情熱は学校全体を巻き込んでいる。



校長先生

いわかみよしむね
岩上芳宗校長先生
「本校にもかつては授業が成り立ちにくい時期もありました」そう語る岩上校長先生。粘り強く学校を建て直し、そして今、先生方の情熱をくむ形で授業の改革へと駒を進めつつある。

静まりかえる教室。しかしそれは授業に集中してのことではない。小学校高学年から中学校へと進むにつれて、教室からいきいきとした子どもの発言が消え、一方通行の講義の場へと変わっていく……。そんな現状を変えたい！という先生方の思いが今、学校を動かし始めた。

取材・撮影：西尾琢郎

長野県中野市立中野平中学校

長野県北東部に位置する中野市は、2005年に中野市と豊田村が合併して現在の姿となった。中野平中学校は、市街地とリンゴ畑が混在する市の中心部近くに位置している。生徒数437名、岩上芳宗（いわかみ・よしむね）校長。

〒383-0046 長野県中野市大字片塩165
TEL:0269-22-4021
<http://www.valley.ne.jp/~nakanoda/>



実践事例 レポート2



長野県中野市立中野平中学校



「変わりたい」 強い思いが叶える“明るい学校”



封筒に入れた「経営戦略資料」を手に、授業のテーマについて説明する牛山先生。真剣さと明るい笑顔を交互に使い分けながら生徒たちに迫っていく話術に脱帽。



グループごとの結論への「自信」のほどを色で示すという仕掛けが楽しい。手を替え品を替えて生徒の声を引き出す工夫の一つだ。

型に並べ替え始める。全体での話し合いに適した配列だ。先ほどのグループ活動といい、この機の並べ替えは、生徒たちにとって気持ちを切り替えるスイッチの役割を果たしているのが見て取れる。準備が整うと、各グループがその話し合いの内容について発表を開始した。

各グループの意見を板書する牛山先生。判定役でなく、あくまで議論に寄り添い助言する立ち位置を貫いた。講義型の授業を否定するのではなく、伝達された知識を本当に生徒に定着させるために、主体的な議論を伴う学びが欠かせないというのが、この改革の理念だ。



たいです！」

そう口々に言う生徒たちを笑顔で見渡す牛山先生もまた、満面の笑みを浮かべていた。私たちの目にも、この後の休み時間にも思いを述べ合ったり、帰り道に学校近くのハンバーガー店をのぞきに立ち寄る生徒たちの姿が目につかぶような、そんな授業だった。

体験から引き出す学び

続いてお邪魔したのは、3年4組の技術科の時間だ。中野平中の授業が生まれ変わるきっかけともなったロボコン。その発信地とも言える技術科では、どんな授業が展開されているのだろうか。

この日の授業は、校長先生からの依頼を受けた生徒たちがグループごとに「会社」を作り、楽しみながら中野市を理解できる小学生向けのゲームを制作するというもの。グループ単位の活動であることはもちろん、「会社」を模して発注者である校長先生と「契約」を結ぶなど、実社会の「もの」「こと」につながる学び

牛山先生は、それぞれの意見を板書していくが、その良し悪しを判定しようとはしない。生徒と同じ立ち位置で疑問を投げかけながら、付かず離れず、話し合いの前進を手助けしていくのだ。この時間は、生徒たちの話し合いで5つの候補地の2つに絞り込まれたところでタイムアップ。「もつと話し合いを続け



明るい表情で意見を述べ合う生徒たち。議論とは勝ち負けでなく、互いを高め合うことだという「実感」がそこにある。



グループ同士の意見を戦わせるクラス全体の議論では、机がコの字に並べ替えられる。身体を動かすことで、生徒のスイッチも切り替わっていく。



「経営戦略資料」に使われた絵地図は、実は教科書から流用された架空の街のもの。それに視点と課題を加えるだけで、より踏み込んだテーマに協同的に取り組むための教材として生まれ変わる。一方、駅の乗降客などのデータは、先生がこの授業のために用意したものだ。

信州中野駅を含む一帯に、経営者としてハンバーガーショップをオープンさせるとしたら……というのが今日の課題だ。「グループで話し合って、それぞれの候補地についてプラス面とマイナス面を出し合いましょう。その上で、どの場所が出店に最適か考えてみてください」

「どうですか。お店を出す場所は決まってきましたか？」

問いかける牛山先生だが、まだ議論中のグループが多いと見るや、決して結論を急かさな

が織り込まれているのも、午前中の社会科の授業と共通する点だ。

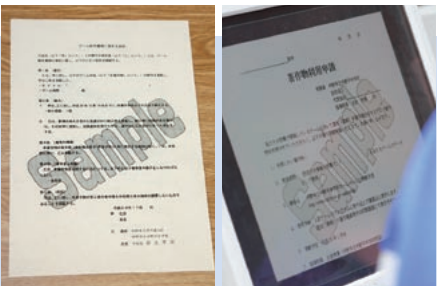
授業冒頭、技術科の土田先生から、前時までに各社から出された企画を基に作られた「ゲーム制作依頼業者紹介」が披露された。愉快な社名を冠した各社は知恵を絞り、特産品や名所など、中野市の特徴を伝えるゲーム作りに腐心している様子が分かる。生徒たちも互いの取り組みに興味深そうに見入っていた。

続いて、実際のゲーム制作がスタート。簡単な操作でゲームソフトの制作が体験できるソフトウェア『ソフトデザイナー』を使つての作業だ。

「おや？」と思わされたのは、コンピュータ室内のレイアウトだ。ゲーム制作作業のためパソコンに向かう生徒たちの机は、4席ずつがひとつの島を構成している。これが各グループ（会社）なのかと思えばさきにあらず、島と島の間の、



島と島の間に座る4人が一つの「会社」を構成するユニークな座席配置。生徒たちの協同作業のための環境は、先生の工夫のしどころだ。



ゲーム内で使用する画像などの素材には、生徒がインターネット上で見つけてきたものも多い。土田先生は「コピー禁止」でなく、著作権者に「著作物利用申請書」を送付し許諾を求めるという、一歩踏み込んだ知的財産教育を行っている。校長先生を発注者とした業務委託契約ともども、用意するのは書式1枚。本格的な知的財産教育に手軽に取り組めるのがポイントだ。



ここでも、土田先生は「教え込む」のではなく、「共に考える」姿勢で授業に臨んでいたのが印象的。

育てながら育つ

この日見てきたように、中野平中では、「講義型」授業を、生徒たちが自ら考え互いに高め合う「学びの共同体」を中心に据えたものへと生まれ変わらせようとしている。「私たち教員の仕事は、大きく分けて4つあると思っています」と牛山先生。それは以下の通りだ。

- 1 生徒と教師が結びつくこと
- 2 教科の本質である学びの意義と内容をしっかりと生徒に伝えること
- 3 生徒と生徒を結びつけること
- 4 地域で生徒を育てる環境作り

これらの中心にあるのは、常に「生徒」。当たり前だが難しい、その実践のために大切なのは、やはり日々の授業だ。

「現在本校では、年に17回の公開授業を

行っています。ほぼすべての学級が行う

計算です」と校長先生。その環境作りのための施策が、職員会議を隔週に減らすなどの時間確保と、公開授業での指導案配布を不要とする先生方の負担低減だ。

「公開授業へのハードルが下がったのは事実です。ですが、もちろん教材研究や授業準備が不要になったわけではありません。指導案作りに費やしていた時間を教材研究などにあてることで、今まで以上に工夫した公開授業が見られるようになってきました」研究主任の視点から牛山先生も頼もしそうに目を細める。

「相手の話を聞く、それが新しい授業作りの基本だと思っています。私たちが生徒の言葉に耳を傾けることからスタートして、生徒たち同士も互いの意見に耳を傾ける。グループ活動を核にした授業は、その実践です。座席の配置や資料の配付など、授業のあらゆる要素を、生徒の『話し合い』を活性化させるために工夫しているところです」と土田先生。

こうした取り組みの効果は、生徒同士の活発な議論や、明るい声が飛び交う校内の様子にハッキリと現れ始めている。「まだ道半ば」と牛山先生は言うが、教師と生徒の「変わる」という実感は、今後に向けた原動力となるはずだ。

授業が変われば生徒が変わる。それは学校全体を変え、やがては地域や社会を変える力になっていくことだろう。